

アードルフ・ワーグナーとヴェルナー・ゾンバルト

——ゾンバルトとその周辺の人々——

池田 浩太郎

第1節 はじめに——問題と論述方法——

1. 私の研究経歴と研究対象
2. 研究対象と方法
3. 私のゾンバルト像

第2節 ワーグナーとゾンバルト

1. ゾンバルトのベルリン大学正教授への道
2. ワーグナー、シュモラーのゾンバルト評価の相違とその由来

第3節 『農・工国家』と『ドイツ社会主義』

1. ワーグナー『農・工国家』改訂第2版、1902年
2. ゾンバルト『ドイツ社会主義』1934年

第1節 はじめに——問題と論述方法——

1. 私の研究経歴と研究対象

私をはじめて経済学の著作に接することができた、との印象をもった時期は、偶然の機会にドイツ新歴史派経済学の代表者の一人、ヴェルナー・ゾンバルト Werner Sombart, 1863–1941 の著作の邦訳書を読まねばならなくなった時であった。もう半世紀以上も前の、私の十代末頃のことであった。

以降、私の二十代前半の数年に亘って、そのゾンバルトの社会・経済学説を、特に彼の社会主義思想の本質と生成とを理解するという視点から、研究を続けてきた¹⁾。

1) 昭和23年の私の卒業論文のタイトルは、「社会主義思想家ゾムバルト」であ

偶然出会ったゾンバルトという人物について、いわば「初恋の人」のような思いで、あるいはファンのような気分でこれを取りあげ、彼自身や彼の学説を順次私なりに理解してゆき、これをわがものとするようにつとめる。これをとおして自らの経済学研究を深めてゆこう、とっていたわけである。

さて、二十代後半の頃、その研究対象を財政学の領域に転換することを指導教官より勧奨され、私もこれにしたがうことにした。いままでいっていた、ゾンバルトという特定経済学者の人物とその学問的業績への、あこがれにも似た関心は、依然として続いていたのであるが、特にその方面の研究を深めるために時間を割くことは、以降殆どできなくなってしまった。そしてこのような私の関心は、何人かの財政学者の財政学説や財政思想を研究する方向に転換されて、今日に至っているのである。

私のとりあげた、ある程度の数にのぼるその財政学者たちの内、私の最も重大な関心をもち続けえた対象者。それは19世紀後半にドイツ財政学の黄金時代を現出させた、「ドイツ財政学の三巨星」(ヘッケル Max von Heckel, 1890年に命名)の随一であるアードルフ・ワーグナー Adolph Heinrich Gotthilf Wagner, 1835-1917 その人であった。そして彼の経済・財政学説ないし思想であったのだ。

以上のような、期間だけは半世紀にあまるほど長い、私の主たる研究テーマの変遷を、学者とその学説の視点から整理してみよう。するとそれは、結局、ワーグナーからゾンバルトへ、という形で絞られうることにもなる。

ところで視点をかえてこれを考えてみよう。ワーグナー、ゾンバルトの両者は、偶然にもベルリン大学における同じ経済学講座の先任者、後継者という、きわめて運命的な関係にあった者たちである。そしてこの講座は、

った。これは後に字句の修正などをした上で、論文「ゾムバルトの社会主義思想——その本質——」成城大学「経済研究」第2号、昭和29年10月、および「ゾムバルトの社会主義思想——その生成過程——」同、第3号、昭和30年2月、として公表させていただいた。

期間的には1870年から1931年までの、およそ二世代六十年間に亘って、ワーグナー、次いでゾンバルトというように、この両者によって占められ続けたのである。

半世紀に亘る私のささやかな研究活動の中軸が、時間的にも、また空間的にも、こんな狭い所にあったことに、私はいま、改めておどろきをかくしえないでいる。

2. 研究対象と方法

さて、このきわめて狭く限定された私の研究対象を、今度はいままでとは若干見方を変えて、いわば肩肘を張らずに取り扱ってみたいと思いついた。

すなわち、まず特定の経済・財政学説や思想を、その把持者から取りだして独立的に研究するだけにとどめない。むしろその検討の重心を、それらを把持する人の、全人間性の側面に移して把握することにつとめてみたい。これをとおして、その人の思想や学問的業績の特色や、それらがもつことになった運命などにも思いを致したい、と考えたのである。

もう少し具体的に述べよう。私の研究経歴の出発点であり、いわばそのファンであり、「初恋の人」でもあったゾンバルトという研究対象を、もう一度初心にかえってその中心に据え、これを理解しなおしてみたいと思うのである。

ゾンバルトの学問や思想の形成に、直接大きな影響をあたえ、また彼の生涯を運命づけることにもなった、ある程度の数の人々がいます。

私がまず注目したいのは、かれらの内、ゾンバルトの師にあたる人々（既述のワーグナーは、その最重要な一人）である。特にかれらの、ゾンバルトのアカデミック・キャリアを左右することになった言動や、その時々々のゾンバルトの学問的業績その他への評価、なども大いに気になる所である。かれらについては、主としてゾンバルトの経歴や、学問、思想の形成

に影響をあたえたかも知れない側面について、ここでは主たる関心をもつことになるであろう。

次いで私が注目したいのは、ゾンバルトとほぼ同世代の人々の内、特に彼と深い交遊ないし交流関係にあった若干の学者、思想家である。かれらにたいしては、学問的、思想的に相互に影響し合った側面などに、主たる注意が向けられることになるであろう。

注目すべき第1、第2のケースに共通していえることであるが、この場合、もちろん、ゾンバルトを思想的にまた学問的に、運命づけることになったすべての人的環境について、これを網羅的かつ体系的に概観することは、目下の私の意図する所ではない。第1、第2のいずれのケースにあっても、ゾンバルトの経歴や業績に関連して、彼のファンとしての私が関心をもった事項のみを、個別的に、かつランダムに拾いだす。そして、これらのそれぞれについて、上記の人的環境の視点から、個別的に検討するにとどめることになるであろう。

第3に、そして最後に、ゾンバルトが、彼の著作の邦訳とか、直接的教授などをとおして、日本の社会・経済学者たちや学界にあたえた影響などについても、この機会に注目してみたい。そして、これらのことに関して私の知る限りの所を、スケッチしてみたい。

以上の所からも想像されるように、これら三つの側面に亘る私の研究は、結果的には、ゾンバルトの経歴や業績に関連するいくつかの事項、ないしはエピソードの断片を、ただ並べ立てるだけ、という形のものに終らざるをえないことになるであろう。となると本研究の成果は、学術論文というよりは、せいぜい私の研究ノート、ないしは多分に趣味的要素をもつ私のゾンバルト研究への備忘メモの形でしか、公表できないことを予めお断りしておかねばならない。

これらをもって、私のゾンバルトへの一層の深い理解に、少しでも資すべき作業をしておこうというわけである。

しかも紙幅の関係もあって、これら三つのテーマはそれぞれ独立した形で、その成果を公表せざるをえない。それゆえ本稿では、それらの内の第1のテーマのみについて、述べるにとどめることになるであろう¹⁾。

3. 私のゾンバルト像

ゾンバルトにかかわる、それぞれの個別的事項に即した記述から、それがゾンバルト理解にとってどんな意味をもちうるのかを汲みとるためには、まず、何らかの共通の基礎ないし基準となるものが、その前提条件として必要となってこよう。

そして、そのための必要最小限の前提の一つとして、ここでは特別に説明を加えることなしに、私が標準的であると考えている、社会学者ゾンバルトの像のみを、準備的にごく簡単に示すにとどめておきたい。

ゾンバルトは、社会・経済体制としての資本主義、社会主義や社会運動、社会改革、そもそも人間共存のあり方など、これらを取りまく経済的・社会的・文化的諸問題の提起と、その解明をめぐって、社会学者として19世紀末から20世紀前半に亘って、つねにドイツの学界および一般社会にも、一石を投じ続けた人物であった。

およそ社会学者、大学教授にして、その学問的業績や社会思想、並びにその生き方に関して、ゾンバルトほどその生涯に亘って毀誉褒貶が多く、しかもそれが定まらなかった者は数少ないであろう。そしてその状態は、ゾンバルトの没後半世紀以上にもなる今日でも、なお続いているのである。

それぞれの評価の由って来たる所には、まことにさまざまなものがあるであろう。しかし、その重要な一つが、ゾンバルトが19世紀末、すでに

1) 本稿は、かつての私の報告「私の財政学研究の周辺」(成城大学「経済研究」第133号、平成8年7月、所収)の、「八 ゾンバルトとワーグナー」の部分の、その後の私の研究の足どりを示すものにすぎない。

若き大学教授にして当時の新興科学であったマルクス経済学の理解者であり、以降も社会主義や社会運動について、積極的な意見表明を続けて来たことにある、ということだけはたしかである。

それはともかく、どのようなものであれ、長い年月に亘った非常に多くの毀誉褒貶という事実そのものは、少なくともゾンバルトが経済学史上きわめて注目すべき人物の一人であることを、示唆していることだけはたしかであろう。

ゾンバルトは、1880年代には共にベルリン大学の経済学教授であった、ドイツ新歴史派経済学の始祖グスタフ・シュモラー *Gustav von Schmoller*, 1838-1917 およびアードルフ・ワグナーのもとで、ドイツ新歴史派経済学の新世代を担うべき重要な一員として育っていった。

ゾンバルトは、今日ではあたり前の言葉として使われている「資本主義」*Kapitalismus* なる用語を、はじめて学界並びに一般社会に普及させた人物である。そして学者としての彼の本領は、その資本主義研究にあったのだ。

彼の三巻六冊におよぶ主著『近代資本主義』改訂第2版、1916-1927年 *Der moderne Kapitalismus, 2. Aufl., 3 Bde., Berlin 1916-1927.* は、「その端緒から現在に至るまでの総ヨーロッパ経済生活の歴史的体系的叙述」(傍点は筆者のもの)という副題をもつ。

すなわち、これはよかれあしかれ、シュモラー経済学説のもつ歴史性と、ワグナー経済学説のもつ体系性、理論性とが統合され、ある意味で均斉を保った壮麗なる姿をもつ業績であった。

この著作への個々の点に関する批判はともあれ、いわばこれは、ドイツ新歴史派経済学の歴史の内、それが新世代に到達しえた頂点を示すべき運命を担った、唯一のきわめて象徴的業績たらざるをえなかったのである。

まことに、ゾンバルトのこの主著を中心とする近代資本主義研究の成果こそが、彼の名を経済学史上に永遠にとどめしめる最重要な業績たらざる

をえなかった、とだけはいえるであろう。

第2節 ワーグナーとゾンバルト

本節では、ゾンバルトの学問や思想形成に重要な役割を果たすことになった人々の内、まず、いわば彼の師にあたる若干の人たちをとりあげよう。そしてかれらがゾンバルトにあたえた影響の側面や、かれらの折にふれてのゾンバルトへの評価などについて、二、三具体的に紹介してみたい。

ここではかれらの内、私がいままで最も強い関心を持ち続けたアードルフ・ワーグナーを、その最も重要な人物の一人として、かれらを代表させる意味で本稿のタイトルにあげさせてもらうことにした。したがって本稿では、ワーグナー以外のゾンバルトの師にあたる人や、大先輩にあたる人物とゾンバルトとの関係について、決して言及しないわけではないことを、予めお断りしておきたい。

具体的にはまず、ゾンバルトのアカデミック・キャリアに即して、ないしは主として大学教授としてのゾンバルトの経歴に即して、これらのことを見てゆくことにしよう。

1. ゾンバルトのベルリン大学正教授への道

比較的最近公刊された、きわめて水準の高いゾンバルト伝とというる、テュービンゲンのレンガーの、570 ページにもおよぶ大著『ヴェルナー・ゾンバルト』1994年 Friedrich Lenger, 1957- , Werner Sombart, 1863-1941. Eine Biographie, München 1994. の第1部は、「正教授への長い道のり」と題されている。

ベルリン大学におけるワーグナーの講座の後継教授の座を占めるまでの、ゾンバルトの大学教授歴は、たしかに三十年近くにもおよぶ非常に長いものであった。しかし、ゾンバルトのこの長い経歴を箇条書き風に並べてみ

ると、比較的簡単なものでもあった。すなわち、

1. 1890年 二七歳で当時のプロイセンのきわめて有能な文部官僚アルトホフ Friedrich Theodor Althoff, 1839-1908 のいわゆるアルトホフ体制下で、ブレスラウ哲学部の員外教授 Extraordinarius となる。
2. 1906年 四三歳で新設のベルリン商科大学に転任。
3. 1918年 五五歳でワグナーの講座の後継正教授としてベルリン大学に転任。

その間、実現はしなかったものの、フライブルク、ハイデルベルク、カールスルーエなどの諸大学への任用の推薦も受けた¹⁾。

これら事項のそれぞれについての経緯などの、精確詳細な記述は、第1次資料への接近の困難から、目下の私には不可能に近い事柄である。そのゆえもあって、ここではこれらの事項に関連しての、ゾンバルトの師にあたる人々、特に彼の最初のゼミ指導教官であったワグナーの、ゾンバルト評価といったものに、まず目を向けてみたい。

ゾンバルトの最初の大学教授歴に関しては、まさに大学人事行政におけるアルトホフ体制そのものを、表明したようなものごとくであった。この時の人事の経過について、ワグナーは基本的にアルトホフのやり方を「途方もないこと」だと考えていた、という理由もあってのことであろうか。ワグナーは事のついでに、彼のかつての門下生でありあり、若くして大学教授となったゾンバルトについて、次のような二面性をもった評価をしている。すなわち、

「ブレスラウの件の成り行きは、途方もないことだと私は思っている。……才能豊かな、思慮も深く、博識の、しかし——未だまさに青二才であ

1) またゾンバルトのベルリン商科大学への転出には、ベルリン大学で講義できるかも知れぬという期待もあったようである。しかし、そのために必須なベルリン大学での教授資格取得 Habilitation は、すでに他大学での教授資格取得者には、ベルリン大学での教授資格取得は制限されるといった、以前の決議を看板に、哲学部から拒否されたようである (Lenger, 前掲書, 175-176 ページ)。

りかつ尊大な人間、彼はまず一兩年大学私講師 *Privatdocent* であつたら、非常によかつただろうに。カンパグナについての彼の著作〔*Die römische Campagna. Eine sozialökonomische Studie, Leipzig 1888.*〕には、たしかに私もシュモラーもひとしく感銘を受けた。だがわれわれ兩名は、決してこの道の専門知識をもった判定者ではないのだ……」(1890年3月30日 Wilhelm Stieda, 1852–1933 宛の手紙。Adolph Wagner. *Briefe, Dokumente, Augenzeugenberichte, 1851–1917*, hrsg. v. Heinrich Rubner, Berlin 1978, S. 257.)。

しかし、1890年代に入ってから若きゾンバルトは、イタリアの社会的・経済的問題、ドイツにおける家内工業や手工業問題、社会政策論やマルクス、エンゲルスの社会・経済学説を含む、社会主義と社会運動、などに関して、著作や論文の執筆や講演の形で、学問的に、またジャーナリストティックに、多彩かつ活発に動きだしていた。

そして彼のこれらの諸活動に、ワグナーは注目していたのであろうか。ゾンバルトの三十代後半の19世紀末頃には、すでにワグナーをして、ゾンバルトをもって「最も卓越した……マックス・ウェーバー *Max Weber, 1864–1920* と並んでおそらくは、ドイツの新世代の経済学者中の最重要な経済学者」(Lenger, 前掲書, 116ページ)とまでいわしめたほどだったのである。

そしてゾンバルトが大学の正教授への任用から外され続けてきたこと、すなわち、先に述べた1890年代以降のフライブルク、ハイデルベルク、カールスルーエの教授就任の働きかけが、つねに水泡に帰したことを、ワグナーは嘆いたのである¹⁾。

1) このような結末に至る理由の中で、ゾンバルトに即していうならば、彼が若くしてすぐれたマルクス理解者として遇されていたことがあげられよう。エンゲルス *Friedrich Engels, 1820–1895* もいう。「[論文「カール・マルクスの経済学体系の批判のために」1894年 *Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx*, in:] *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, VII, Heft 4 [1894.] において、ヴェルナー・ゾンバルトは、その総体においてマルクス体系の概略

20世紀に入ってからゾンバルトは、いわば彼の生涯のテーマともいふべき「近代資本主義」の研究に、本格的に取り組むようになった。以降、次々にこれに関する業績を公表しはじめたのである。

そして時代は1910年代に突入する。この時期に至るや、ドイツ新歴史派経済学の総帥の本丸であり、ドイツ経済学の中心拠点でもあった、ベルリン大学に二つの経済学講座の担当者の交替が不可避の現実となった。時を同じくしてワーグナー自身の、そして彼の同僚シュモラーの、ベルリン大学における経済学講座の後継者をえらぶべき時が到来したわけである。しかし結論的というならば、この時期に至ってもなお、ワーグナーのゾンバルトへの高い評価には、基本的にはかわる所はなかった。

そして、さまざまな曲折をへて、まずシュモラーの講座は、結局シュモラー自身の意向に沿う形で、ヘルクナー Heinrich Herkner, 1863–1932 が引き継ぐことになった¹⁾。

のすぐれた論述をした。ドイツの大学教授というもので、一般的に見てマルクスの諸著作の内に、マルクスが真に述べた所を見てとることに成功したのは、はじめてのことである」(Ergänzung und Nachtrag zum III. Buche des “Kapital”, in: Karl Marx, Friedrich Engels Werke, Band 25, Berlin–Ost 1964, S. 903.)。

そして、彼の著作19世紀における「社会主義と社会運動は、ゾンバルトを一挙に高名にした、しかし彼のアカデミックな栄達をストップさせた」Michael Appel, Werner Sombart. Historiker und Theoretiker des modernen Kapitalismus, Marburg 1992, S. 13.), とはいえるであろう。多くの版を重ね、また多くの国々で翻訳され、ひろく世界中で読者をもつに至った、この著作での名声によって、彼のマルクス主義ないしマルクス経済学説への理解者としての側面が、前面に出すぎた理由によるのではなからうか。

この意味では、彼の師シュモラーもいうように、「マルクスはゾンバルトの宿命であったのだ」(G. Schmoller, Karl Marx und Werner Sombart, Schmollers Jahrbuch..., XXXIII, 1909, in: G. Schmoller, Zwanzig Jahre deutscher Politik, 1897–1917, München und Leipzig 1920, S. 134.)。

- 1) ヘルクナーは、シュモラーよりもむしろ彼の指導教授 Doktorvater ルーヨ・ブレンターノ Lujo Brentano, 1844–1931 に近い学者であったようにも思われる。にもかかわらず、彼がシュモラーの講座後継者に推された理由の一つは、彼の実質的な有力な競争相手と想定されていた、シュモラーの門下生ゾンバルトの、社会主義ないし特にマルクス経済学説への傾倒を、師シュモラーが大いに嫌っていたことにもあったと考えられている。Jürgen Backhaus und Johannes Hanel, Die Nachfolge. Ein Versuch über Heinrich Herkner, den Volkswirt, Marburg

さて、自身の講座の後継者についてワーグナーは、ゾンバルトの業績を高評価しつつも、さし当たりはオッペンハイマー Franz Oppenheimer, 1864–1943 を推していたようである¹⁾。

しかしながら、さまざまな曲折をへて、やがてゾンバルトがワーグナーの講座の後継候補の第1位となる日がやってくる。これにたいしては、ワーグナーはもちろん、シュモラーやヘルクナーら多くの賛成者もでてきた。

1994, S. 56–60.

ちなみに、ヘルクナー、ゾンバルトは共に、シュモラーのドイツ経済学界での支配的地位を誇示するかのとき一六記念論文集 *Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im neunzehnten Jahrhundert*, 2 Bde., Leipzig 1908. に収録された四十編のドイツ内外の学者の論文の執筆者には、名を連ねてはいない。もちろん、両者ともシュモラーの著作 *Charakterbilder*, München und Leipzig 1913. にとりあげられた、二十数名の人物の内にも入ってはいない。これらのことを考え合わせると、シュモラーの講座の後継者に彼自らがヘルクナーを推し、それが実現したことに、改めて私は若干奇異な感じをもっている。

- 1) この件についての、ワーグナー側からの直接的な証拠を私は見てはいない。しかし、オッペンハイマーの側からは、ワーグナー自身から直接「他の二人の専門同僚と並べて、私をも彼の後継者としてベルリン大学正教授に推薦した」F. Oppenheimer, *Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen*, 2. Band, Leipzig 1929, S. 108. ことを聞いた、という証言がある。

ともかく、この人事に関連してワーグナーは、次のようなことを述べている。「尤も、たとえ一面的なものであれ、非常に卓越した資質の持主たち、これには私はゾンバルト、オッペンハイマー、そして変り者だが、マックス・ウェーバーをかれらの世代に数えるが、かれらはこの場合、絶えず無視されてきた」(1914年3月30日、シュティータ宛の手紙。Rubner, 前掲書, 401ページ)。

ワーグナーは、彼が資質ありと見込んだ若者たちの、大学教授任用面での不遇の不満を嘆いたわけである。

ワーグナーは、特にオッペンハイマーについて1913年10月11日のシュティータ宛の手紙にも、次のように記している、すなわち、

「……時とともにフランツ・オッペンハイマーとは個人的に懇意となった。……彼を……私はすぐれた弁証法学者、抽象思想家として、非常に高く評価している」。そしてワーグナーは、1916年には、前述のように最初の候補者リストでオッペンハイマーを、自身の講座の後継者に据えたといわれる(いずれもRubner, 前掲書, 400ページによる)。

いざれにしても、長い目で見ても、オッペンハイマーがワーグナーの最重要の門下生であり、かつ真の友人であったことだけはたしかであろう(Bernhard Kirchgässner, *Adolph Wagner und die Geschichte der Bismarckschen Sozialversicherung, 1870–1889*, in: *Beiträge zur Wirtschaftswissenschaft in Berlin*, hrsg. v. Burkhard Strümpel, Berlin 1990, S. 86 f.)。

しかし、長年のゾンバルトの業績への批判者ないし論敵であった、経済史家ないし歴史学者たちを代表する形で、デルブリュック Hans Delbrück, 1848–1929 や特にマイネッケ Friedrich Meinecke, 1862–1954 は、ゾンバルトの学問への真摯さ、人生への純粹さなどの点に強い疑念をいただき、この人事に根気強い反対を続けてきたのである。

にもかかわらず、事態はゾンバルトに有利な方向に動いた¹⁾。

そして漸く 1917 年に、ゾンバルトがワーグナーの経済学講座の後継者に決定され、翌 18 年に、ベルリン大学の経済学の正教授に任命されたのである。時にゾンバルトはすでに齢五五歳であった。

2. ワーグナー、シュモラーのゾンバルト評価の相違とその由来

教授人事に関連しての、ワーグナーとシュモラーとのゾンバルトの学問

-
- 1) その有利さの原動力になったものの一つに、当時漸く公刊がはじまったゾンバルトの『近代資本主義』第 2 版、三巻六冊、1916–1927 年への、当時のドイツ学界の高い評価があったことは、見落してはならないであろう。

ちなみに、ゾンバルトのベルリン大学経済学教授就任をめぐる紆余曲折について、私にはじめて興味深く教えてくれたのは旧東ドイツの Werner Krause, *Werner Sombarts Weg vom Kathedersozialismus zum Faschismus*, Berlin–Ost 1962, S. 134 ff. の記述であった（この著作については、成城大学「経済研究」第 20 号、昭和 39 年 10 月、所収の私の書評を参照されたい）。

クラウゼはこの著作の公刊の後、二、三の経済学史的著作などを公刊しているようである。たとえば、

1969 年には *Wirtschaftstheorie unter dem Hakenkreuz. Die bürgerliche politische Ökonomie in Deutschland während der faschistischen Herrschaft*, Berlin–Ost 1969. を公刊している。

また 1977 年および 1980 年には、彼を含む共同執筆グループで *Grundlinien des ökonomischen Denkens in Deutschland von den Anfängen bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts*, Berlin–Ost 1977. を、次いで Günther Rudolph との共著で *Grundlinien des ökonomischen Denkens in Deutschland, 1848 bis 1945*, Berlin–Ost 1980. を世に問うている。

しかし残念ながら私は、クラウゼの 1969 年の著作の方は手にすることができなかった。後者の二著作の内容は、結論的にはマルクス主義支配下の旧共産圏での、教科書風の概説的経済学史の記述に終始しているといえるであろう。

私はこれら著作の刊行後のクラウゼの学術的活動、特に東西ドイツ合併後のそれについては、これを詳らかにすることはできない。

や人間への評価には、上述のような若干の相違がみとめられた。

新世代のドイツ経済学者全体の内での、ゾンバルトの地位を相対的に高く評価しているワーグナーの評価の方が、経済学史的には、ヨリ常識的でかつ妥当ではないか、と私には思われるのだが。それはともかく、では、かかる評価の相違の由って来たる所はいずこに存するのであろうか。次にこれについて若干検討してみたい。

さて、ゾンバルトの側からすると、彼の師にあたる人々としては、少なくとも三人をあげねばなるまい。

若き日以来、社会思想的、経済学的に大きな影響を受けたカール・マルクス Karl Heinrich Marx, 1818-1883, ゾンバルトがベルリンで最初に門を敲くことになったアードルフ・ワーグナー、次いでグスタフ・シュモラー、この三人である。

漠然とした表現を使うならば、ワーグナー経済学説はドイツ新歴史学派とオーストリア学派との中間に位置し、そのゆえもあつてか比較的体系的、理論的だという特徴をもっていた。ゾンバルトは学生時代のはじめ、ワーグナーから、経済学におけるその体系性、理論性を受けついだものと思われる。

そしてその後は、ワーグナーの財政学領域での社会政策的財政学説構築への活躍などのこともあつてのことか、ゾンバルトのワーグナーとの直接的接触は、それほど密にはならなかったようである¹⁾。

これに反し、ゾンバルトの Doktorvater となった、ドイツ新歴史派経済

1) 1897年の論文「社会政策の諸理想」*Ideale der Sozialpolitik, Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, 10. Band, 1897. で、彼は「社会政策とは一般に、分配過程の領域における弊害の、立法と行政の諸手段をもって克服しようとする、国家の政策である」(同、4ページ)、とするワーグナーの概念規定をとりあげる。そしてこれを、「唯一明確な定義の用例」(同、10ページ)として、これへの批判を自らの議論の出発点としている。

これは私の知る、ゾンバルトのワーグナー学説への言及のわずかな例の一つである。

学の総帥シュモラーとは、シュモラーの研究テーマなどへの親近感もあつてのことか、学問研究の意味では比較的長く彼のもとにとどまったのである。そして彼は、シュモラーからは、経済学における歴史的考察の必要や意味を学びとることになったと思われる。

しかし、今度はその師の側に視点を移してゾンバルトを評価することを考えてみよう。

シュモラーとくらべと、ゾンバルトとワグナーの師弟間には若干距離があり、それゆえ比較的容易に、ワグナーはゾンバルトの学問的業績を客観的に評価しえ、またゾンバルトのドイツ新世代経済学者たち全体の内の地位を見極めうる所にいた、といえるであろう。事情次第では、ワグナーはむしろゾンバルトを同情的にすら評価したくなる場所に、いたのかも知れない。

このような状況下にあったからこそ、つねにきわめて大まかな表現ではあるが、ゾンバルトとウェーバーとを、ドイツ新歴史派経済学の新世代の代表者に見立てえたワグナーの炯眼は、経済学史的に見ても正鵠を射たものとなったのであろう、と私は思っている。

ひるがえって、シュモラーにとってゾンバルトは、よかれあしかれ、長い間身近にいた門下生の一人であった。両者の接触も多く、したがってゾンバルトの学問的関心や業績、その人間と日常について、比較的よく知りうる立場にシュモラーはあつたのだ。

実際にもシュモラーは、ゾンバルトの時々学問的業績にも、折にふれてかなり多く言及し、評価もしてきている¹⁾。

1) これらの内、雑誌「シュモラー年報」に掲載されたシュモラーの、ゾンバルトの著作の書評の若干を示しておこう。シュモラーは同誌、第27巻、1903年、291-300ページで『近代資本主義』1902年を、第33巻、1909年、1235-1241ページで『Das Lebenswerk von Karl Marx, Jena 1909. (既出)』を、第38巻、1914年、961-965ページで『ブルジョア』1913年『Der Bourgeois. Zur Geistesgeschichte des Wirtschaftsmenschen, München und Leipzig 1913.』を、第39巻、1915年、2010-2011ページで『Händler und Helden, München』

シュモラーにとっては、批判ないしは非難の対象でさえあったマルクス社会・経済学説。しかし彼は、「熱烈なマルクス主義者であった」青年時代のゾンバルトを身近で見続けてきた (G. Schmoller, *Zwanzig Jahre deutscher Politik*, S. 127.)。

シュモラーが1870年代はじめに、自らがその設立に参画し、長くその指導的地位にとどまった、そして結局はドイツの経済学者たちの唯一の総合的学会となったドイツ社会政策学会 *Verein für Socialpolitik*。そこではシュモラーは、進歩的左派らしい姿を見せているゾンバルトに出会わねばならなかった。

また、20世紀はじめのいわゆる価値判断論争においても、学問の名においてシュモラー流の「倫理的」経済学の立場の排除を要請する、マックス・ウェーバーに与したゾンバルトから、眼をそらすことはできなかつたであろう。

以上のように、シュモラーにとっては、ゾンバルトはワーグナーにとってよりも、はるかに近い、いわば愛憎相半ばするような門下生であったと思われる。

シュモラーはゾンバルトにたいしては、彼の個々の研究成果にたいして、その都度指導教授として批判もし評価もしてきた。にもかかわらず、ゾンバルトの学問的業績の全体的、客観的評価をするには、シュモラーはゾンバルトという人間全体にたいする好悪の感情を、消し去りにくいほど身近な人間であった。

そもそも教授就任人事などに関しては、ゾンバルトの全学問的業績や全人格への、客観的評価が当然求められるべきである。しかしシュモラーにとっては、ことゾンバルトのケースに限っては、その客観的評価は案外困難なことであったのかも知れない。また、このような評価を下したいとも思

und Leipzig 1915. を、
それぞれ論評している。

わなかったのかも知れない。それはそれで、やむをえないことではなかったか、と私は思っている。

以上をスローガン風に要約しておこう。

ゾンバルトは、シュモラーからは経済生活の歴史的理解の手法を自分なりに学び取った。そしてこれを、ワーグナー風の経済生活の体系的・理論的理解、ないしは特にマルクス経済学研究に関連して想をえたとも思われる、「経済体制」的な理解の方法で整理した。ドイツ新歴史派経済学の到達した頂点をも示すべき運命を担ったゾンバルトの業績、『近代資本主義』第2版、三巻六冊、1916-1927年こそは、まさにそれが実を結んだものであったのだ¹⁾。

1) ここで補足的に、ブレンターノのゾンバルトの業績評価についても一言しておかねばならない所であろう。

たしかにブレンターノは、ゾンバルトの直接的な師ではない。しかし彼は、シュモラー、ワーグナーに次いでドイツ新歴史学派を代表すべき、かれらと同世代の経済学者であった。また彼は、中道派、保守派を代表するシュモラー、ワーグナーと並んで、ドイツ社会政策学会での進歩派ないし自由主義派ともいべきグループの、リーダーでもあった人物なのだ。

それゆえ、ゾンバルトの師シュモラー、ワーグナーのものに加えて、彼の大先輩ブレンターノのゾンバルト評価を紹介することによって、当時のドイツ経済学界における最も有力な代表者たちの、当時における新世代の経済学者ゾンバルトの評価を、最小限にはあるが、一応、網羅的に見ることになるであろう。

ただし、ブレンターノのゾンバルト評価については、本稿の続きでもある別稿「マックス・ウェーバーとヴェルナー・ゾンバルト——ゾンバルトとその周辺の人々——」でやや詳しく取り扱う予定である。それゆえここでは、その結論のみを簡単に述べるにとどめたい。

ブレンターノは、ゾンバルトの著作『近代資本主義』全二巻、1902年、および『ユダヤ人と経済生活』1911年 *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, Leipzig 1911. にたいして、それぞれ60ページをこえる長大な批判論文を公表している (L. Brentano, *Der wirtschaftende Mensch in der Geschichte. Gesammelte Reden und Aufsätze*, Leipzig 1923, IX *Handel und Kapitalismus* und XI *Judentum und Kapitalismus*.)。

『近代資本主義』については、ブレンターノは、個別的には反対すべき多くの箇所があるにせよ、一応この著作は「明らかに非常に資質の豊かな人物の、並外れた勤勉かつ包括的な研究の成果」(Brentano, 前掲書, 301ページ)である、という風に総括的評価をしたと考えてよからう。

しかし後者は、自分の学説に合致さすべく、都合よく取り扱う「原資料解釈

第3節 『農・工国家』と『ドイツ社会主義』

社会学者としてのアードルフ・ワーグナーとヴェルナー・ゾンバルトの両者が、それぞれの晩年に漸くたどりついた希求すべき社会・経済像は、そこはかたなく似かよっている。このことにかんがみ、本節では両者が最終的にもつに至った社会思想の具体的な姿を、簡単に紹介し、もって本稿の結びとしたい。

1. ワーグナー『農・工国家』改訂第2版, 1902年

ワーグナーはつとに、自らを社会政策論者と称するよりも、むしろ「今日の『国家社会主義』の理論的かつ実践的な代表者」¹⁾の一人という方が適切である、と考えていた。

そしてその晩年には、ワーグナーは「総体の守護者としての国家」という立場から、彼のいう国家社会主義の基本構造を、次の三点に要約している。

1. 巨大化しすぎた私企業の適宜適切な国（公）有化
2. 経済健全化のための特定経済領域への国家の規制的干渉
3. 社会的かつ公正な財政・租税政策²⁾

の恣意性が一層強く示された本」である。しかもこれは「自らを超人と感じている思い上りの、軽佻さにみちた本」でもあった。そして、この著作の公刊こそはまさに、「ドイツの学問の領域での最もなげかわしい出来事の一つ」とさえ、プレントナーは感情的に断じたのである（いずれも、同、428, 429ページ）。

- 1) August Skalweit (hrsg. v.), Adolph Wagner, Finanzwissenschaft und Staatssozialismus, 1887, Frankfurt am Main 1948, S. 37.
- 2) Ad. Wagner, Die Strömungen in der Sozialpolitik und der Katheder- und Staatssozialismus, Berlin 1912, S. 19-21.

尤もワーグナーは、すでに1887年の前掲論文で国家社会主義の達成すべき諸要請を、次の七つの短いテーゼの形で総括している。

1. 生産行程の統制化によるヨリよい生産秩序の構築。
2. 投機の抑制。
3. 生産の成果や文化財への大衆の包括的参加の実現のための諸方策。「労

このようなワーグナーの上からの改革的・保守的・国家社会主義的志向は、彼の思いうかべたドイツの社会・経済全体についての理想像に、かなり明瞭な姿をとってみとめられる。

「効率よきドイツ農業の維持は、ドイツ国民の現在および将来に亘る維持を意味する」(2ページ)¹⁾。祖国の防衛力の点からも、一面的な工業的・都市的發展と、農業的一田園の人口の減少は危険である(218ページ)。「永続的国民総利益とわが全ドイツ国民経済の視点から、一面的な、はびこりすぎた近代工業国家体制は不利だと判定すべきである」(221ページ)。

かくして比較的晩年のワーグナーは、極端に近代的な(大)工業国にならぬよう、農業と工業のバランスを保った並存構造に、ドイツ経済の理想的姿を思いうかべていた、といえるようである。

2. ゾンバルト『ドイツ社会主義』1934年

ゾンバルトは、1920年代に畢生の大著『近代資本主義』第2版、三巻六冊、1916-1927年を完成させ、これをもって彼は、一応、近代資本主義研究という経済学者としての主要研究テーマについての、学問的研究活動を終了させた。

この時期以降ゾンバルトは、近代資本主義のもつ個人や社会や文化への意味を問う、またそもそも、人間の共同生活の意味を問う、いわば、その社会学的・人間学的側面に、研究関心の重心を移していったのである。

働者保護」や「労働者保険」。

4. 立法的・行政的・財政的国家援助 *Staatshilfe* の原理的正当化の承認。
 5. 土地・資本所有者、企業経営者の不労所得などのかなりの部分の国庫への導入可能な財政の構築。たとえば大通信・運輸・銀行・保険など、国(公)営、国(公)有の方が適切な土地、資本、企業のそれへの移行。
 6. 公共団体の共同経済的性格の程度を調節すべき財政入用充足の構築。
 7. 社会政策的任務をも担いうる課税の制定。
(前掲「財政学と国家社会主義」42-46ページ)
- 1) Ad. Wagner, *Agrar- und Industriestaat*, 2. Aufl., Jena 1902. からの引用ページ。以下も同じ。

三十年にもおよぶゾンバルトの近代資本主義経済体制の歴史的・体系的な研究は、それが進捗するにつれ、一方では、近代資本主義経済のもたらした、人間の社会や文化そのものへの意義について、彼を決定的な文化理想主義的悲観論者にさせるようになる。そして、遂には彼をして、資本主義へ後ろ向きの態度をとる境地へと、到達せしめたようである¹⁾。

他方、19世紀末頃から、その資本主義の社会的・経済的対立者ないしは克服者と見てきた社会主義ないしマルクス主義にたいしても、20世紀に入ってからは、ゾンバルトはそれがもつべき歴史的役割について、追々と懐疑的になってきた。この傾向は彼を一躍世界的に高名な学者にした既述の『19世紀における社会主義と社会運動』1896年 *Sozialismus und soziale Bewegung im 19. Jahrhundert*, Jena 1896. の改版毎に色濃くなっていったのである。そして1920年代に入ると、彼はいわば文化理想主義者として、それへの敵対者のような社会観、文化観を示すに至るのである。

このようなゾンバルトの内面における変化は、ついに晩年の彼をして、人間の経済、社会、文化のあるべき姿を体現するものとしての『ドイツ社会主義』1934年 *Deutscher Sozialismus, Berlin-Charlottenburg* 1934. を公刊させることになった。

七十歳をこえたゾンバルトは、近代資本主義下でのここ百五十年間の本質の中核、人間生存の基本的価値基準を「経済時代」*das ökonomische Zeitalter* と総括した。ここでは経済(的利益)が、物質的重要性が、他のあらゆる価値にまさって優位を求め、経済のもつ特性が、この時代のすべての社会、文化を特徴づけたからだ、と彼はいうのである。

では、ゾンバルトが「経済時代」について具体的に、どんな像をえがいて

1) 資本主義が「なんらの文化的に意義あるものをうみださなかったし、しかも全将来に亘ってもうみださないであろうことを、われわれは知っている」。「われわれは資本主義からの反転と転向にのみ、救済をみとめうるのである」。「マルクスの顔は前方を向いていたが、われわれの顔は後ろをふりかえっているのだ」(いずれも『近代資本主義』Ⅲ, 1927年, 序言, XXI ページ)。

ているのか。これについては『ドイツ社会主義』第1編から、いくつかのスローガンを拾い出すだけでも、容易にそのあらましの想像がつくであろう。すなわち、

繁栄と進歩への信仰

貨幣価値の徹底的承認、富が権力に

階級と階級闘争は経済時代の嫡出子

人間生活の快樂価値方向へのねじまげ

大きい、速い、新奇なものが理想的なもの

等々。

こういった「経済時代」的生活様式からの全面的転向こそが求められているのだが、上のスローガンで見たように、プロレタリア社会主義（マルクス主義）は、まさに「経済時代」的価値基準の下にあるので、もはやこれに頼ることはできない、とゾンバルトは考える。

かくしてゾンバルトは、「経済時代」の文化的荒廃からの全面的な転向の体制こそを、ドイツ社会主義の任務だとする。これは、ドイツのための、ドイツの身の丈に合わせて裁断された衣服のような、一種の社会規範主義であるのだ。そしてこれは、一つの個別的国民社会主義 **Nationaler Sozialismus** でもある（同、121-122 ページ）。

「経済時代」の精神全体の否定であり、反資本主義でもあるドイツ社会主義は、国家ないし為政者の力による社会主義である。しかしそれは、ワーグナーの国家社会主義よりも、はるかに全面的かつ徹底した社会規範主義であるといえよう。

そしてこれは、

文明から文化への価値体系へ

進歩の信仰からの解放

祖国と神への忠誠

といった方向で押しすすめられよう。そして、当時信奉されようとしてい

た「指導者原理」Führerprinzip は、神からの最高指導者意志の取得の仮定のみによって存立している、とゾンバルトはいうのである（同、213 ページ）。

以上のような考え方を基礎に、ドイツ経済はどのような方向に進むべきか、とゾンバルトは考えたのであろうか。

それは、やや具体的にいうならば、ドイツの軍事的・民族的・経済的理由からの、完結したアウトルキー化を目ざす経済体制、別の言葉でいえば、包括的・統一的・多様の計画経済化である、とゾンバルトはいう。

その若干の具体例をあげるならば、

（原始的と近代的との中間にあるべき）農業、手工業を重視拡充すること。これえの資本主義精神の侵入を防ぐこと。

（大銀行、巨大交通企業、国防産業など）大経営の適宜適切なる公営化や協同組合化の促進。

ゆるやかな技術的・経済的進歩によって生産の持久性と不変性を保持すること。これによる経済沈滞と失業を防ぐこと。

国家による労働力や雇用の拡大政策とその推進のための通貨・信用政策の展開。

などがこれである（同、第6編）。

ベルリン大学経済学講座の前任者、後継者としてのワーグナー、ゾンバルトそれぞれの晩年における社会思想の着き先は、総括すれば、結局、ともに上からの改革的、保守的、（国家ないし国民）社会主義的な姿のものであった。両者の間には、かなりの程度の類似性がみとめられよう。

しかしその類似性は、かつての両者の師弟関係から、ゾンバルトがワーグナーから学びとったものだ、といえるようなものではない。むしろ両者はそれぞれ独立的に、この境地に到達したものと見る方がより妥当ではなからうか。

尤も、その類似性の奥にある両者のニュアンスのかなりの程度の相違は、両者の思想の本来の相違と考えるよりも、場合によっては、両者の背景にある時代の政治的・社会的・経済的環境の相違が、そのニュアンスの相違となって反映されている、と思える部分もないではないようにも思われる。

ワーグナーの社会思想は、19世紀末から第1次世界大戦時に向っての、まさに一層の興隆を目ざしていたドイツの諸環境下であって、自らの老年期を迎えた、頑固な保守的志向の持主によって形成されたものであった。

一方、第1次世界大戦の敗戦と破局的インフレーションを含む、戦後ドイツの政治的・社会的・経済的大混乱と大変革の諸環境下であって、老年期に入った、自らの存立と維持にさえも大いに苦悩せざるをえなかった、多分に文学者的・芸術家的気質をもつ情緒的文化理想主義者ゾンバルト。彼が自らの老年期の不安を、漸くナチ政権下で、その安定を見いだしたいと願ったであろうゾンバルトの社会思想。これがワーグナーのそれとは似てはいるが、しかし彼独自の保守的・国民社会主義的・文化理想主義への信仰告白のような形の社会思想をうんだ、一つの重要な要因であったのかも知れない。

付記

本稿は、平成12年度成城大学教員特別研究助成にもとづく共同研究「ヨーロッパ世界の社会・経済思想」における、筆者分担分の研究成果の一部である。